

# 幕末の国学者 間宮永好の考証会と歌会

— 『喚犬喚鶏舎日次記』から(三) —

中澤伸弘

## はじめに

江戸の井上文雄方での留学を終へた伊勢の佐々木弘綱は、翌安政六年六月、萩原廣道宛にかやうな書簡を送つてゐる。

江戸は歌よみのみにて学問を専一と仕候人は稀に候処 此人は考証を第一とせられ候故 在江戸中は兄弟のごとくむつび申候<sup>(1)</sup>

ここに見える「此人」は横山由清のことである。弘綱は江戸に歌人は多くゐるが考証の学問を旨とする人材が少ないことを指摘してゐる。弘綱が半年余りの江戸滞在中に通じた人物はかなり多いと推測されるものの、彼はその日記に黒川春村と山田千寿の二名を書くに留まつてゐる。殊に春村には「先生」と書いてゐる<sup>(2)</sup>。学問と言ふ点で由清を高く評価してゐる弘綱にとつて、春村は先生と呼ぶべき、当時の江戸での学問第一の人物であり、その周辺には由清をはじめ小中村清矩、木村正辞などと言つた人物がゐるのである。ここに取り上げる間宮永好もその一人である。江戸第一の蔵書家と評された高田與清の第一の門人を自負し、師の号である「松屋」を名乗つた永好は由清、清矩、正辞な

どとは二十歳余の隔たりがあつたが、弘綱が江戸に滞在した安政末年以降はかなり頻繁に交流してゐたのである。近年大沼宜規氏により考証派国学者として小中村清矩の存在が明らかにされてきたが、その周辺にゐた間宮永好（文化二年—明治五年 高田與清門 水戸藩士）について今少しわからないだらうかと考へてきた。彼には四年余の断片的ではあるものの、日記である『喚犬喚鶏舎日記』（安政六年—文久三年 盛岡中央公民館蔵 以下『日記』）が残されてをり、それを材料に、改めて永好の家族関係や人物像（人物伝）また高田與清の入門、当時の江戸歌壇の一端をはじめ、考証派の周辺の活動、大名家との関係など、当時の永好の周辺やこの『日記』の性格についてまとめてみた。<sup>⑤</sup>本稿は更にその中に見える考証会と歌会との実際について述べ、永好の考証家としての一面と歌人としての姿を描いてみようとの試みである。なほ『日記』についての書誌学的な解説等は先掲の拙稿を参照されたい。なお文末に『日記』の記述内容の概要を表にしたので参考とされたい。

## 一、「萬葉会」および他の研究会

### イ、『日記』に見える「萬葉会」

後に萬葉学者として名高い木村正辞が幕末から「萬葉会」と称して萬葉集の研究会を催してゐたことは、既に藤井貞文、河野頼人などにより指摘されてゐて、また大沼宜規『考証の世紀』の第二部第三章「木村正辞の『万葉集』考証」にも述べられてゐる。藤井の資料は小中村清矩の手になるものであるが、同じ会に永好も参加してゐて、そのことがこの『日記』から分かるのである。これは萬葉集に關しての研究会であつて、この『日記』の書かれた四年余の間に二十七回もの記述があり、永好はその第一回から積極的に参加してゐることは特筆されよう。但しその記述

は「萬葉会」とのみあり、会場が書かれる程度でどのやうな話題であつたかはここには書かれてゐない。

『日次記』の萬延元年六月十五日（清矩の記録は十三日と齟齬）に「萬葉集略解正撰補注会」と見えるのが第一回目、これは木村正辞の呼び掛けであつたのであらうか最初は木村宅を会場としてゐる。

萬葉集略解正撰補注會はじめ、木村正辞第、出席者八十子久米幹文由清第主

とあつて、当日の参加者は第主（会場の家の主人）正辞の他に永好妻の間宮八十子、八十子の姉の夫である久米幹文、そして横山由清とあり小中村清矩の名が書き落としたのか抜けてゐる。後に萬葉学者と称される木村正辞の活動は既に始まつてゐたのである。会場もこれらの家の周り番であつたやうで、『日次記』に会場の記載がない時は間宮宅であつた可能性がある。名称も最初は「萬葉集略解正撰補注會」とあることから、会の目的は加藤千蔭の『萬葉集略解』を教材として、それを検討する会であつたやうである。当時萬葉集の全ての歌に注解が施された書物で、刊行されてゐたものは本書しかなかつたのであるし、参加者に江戸派の流れを汲むといふ意識が少しはあつたことであらう。「萬葉会」は月に二度の定例（一度のこともある）で開かれてゐたやうであるが、永好はかなり積極的に参加してゐて、『日次記』にその日付と場所が毎回書かれてゐる。尤もこれは永好が参加した時のものであり、後述するが彼が不参でも開かれてゐたことを思ふと全体での回数は更に増すことになる。（事実この会は慶應四年六月まで開かれてゐた。）次に『日次記』に見える「萬葉会」の記事を挙げておく。

萬延元年六月十五日 萬葉集略解正撰補注会始 木村宅 参会（久米幹文 横山由清 八十子）／六月二十四日横山宅／七月九日間宮宅／七月十九日木村宅／八月五日間宮宅／八月二十八日小中村宅／九月五日小中村宅（不参）／十月二十二日（場所記載ナシ）／十一月四日（場所記載ナシ）／萬延二年一月十五日読始 木村宅／文久元年三月十九日（場所記載ナシ）／四月五日（場所記載ナシ）／四月二十八日木村宅／五月十日横山宅／五月二十七日小中村宅／六月三日（場所記載ナシ）／六月二十八日（場所記載ナシ）／八月二十八日横山宅／十月二十三日（場所記載ナシ）

／十一月八日(場所記載ナシ)／十二月三日小中村宅／十二月十八日木村宅／文久二年三月二十八日萬葉集會読  
小中村宅／四月八日 萬葉四卷 諸説今案書入畢 木村宅／六月二十九日横山由清不參 妻がはしかと木村正辞  
の談／閏八月九日木村宅 小中村宅は遠くなつた／九月八日読六卷 横山木村来 清矩欠 幹文忌中／十月九日  
(因幡中将北の方首途 八十子送る)小中村疾瘡不參／十月二十八日(場所記載ナシ)／十一月二十三日横山宅／十二  
月九日(場所記載ナシ)

右からわかるやうにその記事は日付と場所が主で、どのやうなことが研究されたのか、その内容に関しては残念な  
がら記事を欠いてゐる。

#### 口、『萬葉會讀記』の記載との比較

一方で先にも触れた別の参加者である小中村清矩の筆記記録が、既に藤井貞文によつて概略紹介されてゐる。それ  
は国立国会図書館蔵の『萬葉會讀記』であり、いまその記述と『日次記』とを比較すれば二十七回中二十三回が双方  
共に認められる日であり(○印、但し日が若干相違あり)、『萬葉會讀記』にあつて『日次記』に欠く日(×印コレハ永好の  
不參にヨル)が八回あり、また逆に『日次記』にあつて『萬葉會讀記』に無い日(●印コレハ清矩の不參にヨルカ)が八回  
ある。これにより更に回数は増え、間違ひなく月に二回を定例にしてゐたことがわかる。その一覽を次に挙げておく  
が、かやうに見ると永好の出席率はかなりよいと言へ、萬葉集の考証についての興味があつたことを示してゐる。

萬延元年六月十五日○(『萬葉集略解正撰補注』ニハ十三日)／六月二十四日●／七月九日○／七月十九日○／八月  
五日○／八月二十八日○／九月五日○(日ヲ欠ク)／十月二十二日○(二度アルノ何レカ)／十一月四日○／萬延二  
年一月十五日○／文久元年三月十九日○／四月五日○／四月二十八日○／五月十日○／五月二十七日○／六月三  
日○(八日カ)／六月二十八日○／七月九日×(日次記載ナシ)／七月十八日×(日次記載ナシ)／八月八日×(日

次日記載ナシ)／八月二十八日○／九月二度×(日次日記載ナシ)／十月二十三日○(但シ二度ノウチ一度×)／十一月八日○／十二月三日●／十二月十八日●、文久二年二月八日×(日次日記載ナシ)、二月二十八日×(日次日記載ナシ)／三月二十八日○／四月八日○(九日カ)／五月九日×(日次日記載ナシ)／六月十九日×(日次日記載ナシ)／六月二十九日○／八月二十八日×(日次日記載ナシ)／閏八月九日○／九月八日●／十月九日●／十月二十八日●／十一月二十三日●／十二月九日●

また、文久二年の秋以降、清矩の欠席が続いてゐるが、これは『日次記』によれば「小中村疾瘡不參」とあり、この『萬葉會讀記』にその記載を欠くことは彼が病氣になつたためであり、その傍証ともなる。このあと文久二年の記載がないのは清矩の病氣が長引いたためなのであらう。由清の妻がはしかなつたり、また麻疹やコレラの流行のさなかも、頻繁に会が開かれてゐて、「萬葉會」に關してのある執着を感じるものである。一方永好の欠席理由は明らかではないが、例へば文久二年二月二十八日はその前後の記載から風邪気味であつたことが分かるし、同年五月九日は箱根行の数日前で多忙、六月十九日は箱根歸りの二日目などの理由が挙げられるであらうか。なほこの年の八月二十八日は「続日本紀會讀」が横山由清宅で行はれ、永好はそちらに出てゐるが、同日に萬葉會も行はれてゐて(後述『日次記』にはその言及はないものと同時に同所で開かれてゐた可能性がある)。

『萬葉會讀記』によれば萬葉集の各巻が検討された月日が分かり、慶應三年までに卷十二まで進められてゐる。これに關連して『日次記』の文久二年四月八日には「萬葉四卷 諸説今案書入畢」とあり、九月八日に「卷六」との断片的な記載があるもののこの巻数が合致し、その検討内容の一つの傍証となつてゐる。また河野頼人の翻刻による会の記録には「正云」と圧倒的に木村正辞の考へが記録されてゐるが、「永云」といつた永好の考へも幾つか見えてゐて、その検討の内容もわかる。

## 八、「萬葉会」その後

ところで、永好の『日次記』は文久三年二月十六日以下の記載を欠くが、『萬葉會讀記』によればこの会は二月二十八日以降暫く中断し、その後五月に再開し、そのあとは慶應四年六月まで頻繁に開かれてゐる。またこの二月二十八日以降の中断については、同書に

此後、世の中さわがしかりしかば、暫く休会、間宮は常陸国太田といふところへ移り住て、此より以下は木村横山おのれと三人になりぬ

とあつて、江戸在府の水戸藩士である永好は、地縁を頼りに常陸太田へ移住してゐることが知られ、それ以後の参加がなかつたことが分かる。当時の江戸の混乱は『武江年表』にあるやうに英国艦隊による江戸攻撃の噂もあつた。<sup>(7)</sup>流石にこのやうな会を催してゐられる社会状況ではなかつたやうである。

ただ、永好の常陸移住はこれの影響とは別にあつたやうである。これより半年も前の文久二年八月二十五日の『日次記』に「世の中いたうかはるにつけて、行末のおきてども、さまざまかたらふ、こん春はしたしき人々水戸へうつらふべければ、諸共にかむとさだむ」とある。これは幕府が参覲交代の制度を緩和し、正室の帰国を許すと言ふ方針を出したことによつて水戸へ引き上げるのであり、一概にこの時期の騒ぎによるものとは別に、予め定まつてゐた移住でもあつた。『日次記』の記載がここで終るのも、この常陸退去と関係してゐるのではないだらうか。後述するが常陸関係の歌人の撰集である『類題衣手集』の作者姓名録には永好の居住地が「常陸太田」とある。八十子にいても同様であつて、文久三年に一時期江戸を去つたことがここからも知られる。永好の遺歌集である『松屋歌集』には「太田に住ける比よにむづかしきことゝもあけくれ聞えけるに」と題する歌があり、また「太田の郷に有ける比」と題する歌もある。

ところで当時萬葉会に参加した正辞、由清、幹文らは三十歳半ば、清矩が四十前後の年齢と近い世代であるのに対し、永好独りは五十歳半ばといふ一番の年長者であつた。それでも同輩として何等隔たりのない人間関係であつたことは、さやうなことを気にとめない永好の人柄によるのではなからうか。そして萬葉集に関しても、発言の記録は殆どないもののかんりの興味を抱いてゐたことがわかる。『犬鷄隨筆(喚犬喚鷄雜記)』には萬葉集にある語の考証記事が多く含まれ、または萬葉集の記事を引いての考証が多く書かれてゐる。永好著の『掌中和歌年中行事』の巻末に「間宮先生著書目録」には萬葉集に関する永好の著作として、

- ・萬葉長歌部類 四冊 / 萬葉古今等よりはじめ□□の世の人のまで広くあつめられたり
- ・萬葉地名抄 二冊 / 萬葉集に出たる地名を悉くぬき出し、秋のねざめの如くにとりなされたり
- ・萬葉集類語 五冊

の三種を挙げてゐる。これらの著作はこの後の火災により消失したと伝えられてゐるが、永好の周辺にゐた木村正辞の『萬葉集書目提要』やその簡略版の『萬葉集書目』は、このやうな営みと関連しての産物であつたのであつて、何れもこの後の幕末の慶應の頃に形となつてゐるのである。

## 二、「続日本紀会」

序に先にも触れた「続日本紀会」についても述べておかう。これは文久二年三月十八日条に「続日本紀会読今日より始む いづれも萬葉会読の人々なり 最初より四年二月(の十張左)まで十張畢 巳刻より未下におよべり」と、初めて見え、参加者は萬葉会と同じ人物であつた。午前中の九時過ぎ(巳刻)から三時頃(未刻下り)まで行なはれ、内容は巻一卷頭から文武天皇四年二月までの読み合はせ(校訂)であつたのだらう。手許にある板本の『続日本紀』にあつたれば十丁ウラが丁度文武天皇四年二月である。その後八月二十八日に「続日本紀の会読 横山由清の家にてものす

萬葉会」とあり、この日は萬葉会も同所で行はれたのである。また会の後に蜂屋光世の『江戸名所和歌集』の序文を書いたことがわかるが、刊行された『江戸名所和歌集』の永好の序文本にはその月日が書かれてゐない。<sup>9</sup>この頃参会者である小中村清矩は『続日本紀』の校合をしてゐたことが大沼宜規氏によつて指摘されてゐる。<sup>10</sup>これによればその実態や継続は不明なものこの「続日本紀会」は清矩の発意によるものではなかつたかとも考へられよう。

また、「源氏物語講義再開」の記事が萬延元年七月二十一日条にあるが、ここに一回見えるだけであり、いつ中断したのかも不明で、また再開されたもののこの後に継続されたのかもわからない。ただ源氏物語の講義もなされてゐたのである。

何れにせよこのやうに地味ながら文献の考証と言ふ研究会が幕末のこの時期にこれらの同一の人物によつて重ねて行はれた事実は特筆されるべきであり、後に大きな力となつてゆくものである。それは考証と言ふ積み重ねてゆく学問の楽しみでもあつた。後に木村正辞は横山由清の『尚古圖録』に跋文（明治三年）を書いて、次のやうに言ふのである。この本はわが友横山由清ぬしが、古へしたふ心のあまりに器物であれ書画であれ「古へを考ふるたつきともなるべきかぎりを、あつめ出たるにて、かのいたづらに旧たるを好み翫ぶたぐひと、日を同じうしてはいふべからず」と。ここに明らかに過去のものを翫ぶ懐古趣味とは峻別された、考証といふ将来へむけての学問の萌芽の自負を見るのである。

## 二、歌会の記事

### イ、永好の歌人の側面

考証に熱を入れた永好ではあるが、歌人としても動かない位置にあつた。『日次記』の中で一番大きな割合を占め

るものが「歌会」の記事であることがそれを示してゐる。ただ歌会の記事は、いつどこでどのやうな題で歌を詠んだといった自詠の書留であり、その当日の参会者の名や他の出詠歌の記載を欠くので記録としては価値は低いものである。とは言へこの時期の永好の周辺には月に数度の歌会が催され、それに或る時は一人、また八十子を伴ふなどして参会してゐることがわかるのである。歌会には予め歌題として出されてゐた「兼題」の歌を持ち寄り、また当日の題である「当座」の歌をその場で考へて詠み、披露したやうである。

四年余の歌会を初めとする記載を時系列的な記録として文末に表にまとめたが、歌会を主催者別に分けて、その概ねを多い順に示せば、永好が主宰した自分の家での月次歌会（毎月十一日）二十二回、加藤千浪歌会（主に毎月十四日）十五回、横山由清歌会十五回、井上文雄歌会十回、蜂屋光世歌会八回、天野政徳歌会四回（うち文久元年十一月は追悼歌会）となる。（他の数回の会は後述）。このやうに見ると彼が積極的に参加した歌会は加藤千浪、横山由清、井上文雄、蜂屋光世、天野政徳と言つた特定の、ある範囲の人物が主宰する会に限られてゐることがわかる。次にやや煩雑だがその全てを挙げておくが、これは『日次記』にあるもので、永好の欠席や書かれてゐない期間に歌会があつたなどの書き漏らしがあることを考へると、その数は尚多きを数へることであらう。この数だけでも当時の江戸の町には歌会が頻繁に行はれてゐたことがわかる。

安政七年から文久三年にかけて、ここにも名の見える蜂屋光世によつて編まれた『大江戸倭歌集』は、その序文によれば、一つの歌風によることなく、二條六條、冷泉飛鳥井、真淵宣長、千蔭春海と江戸に關する人物の歌を広く集めたものであるといふ。歌集としてはこのやうな形もできたのであらうが、実際の歌会となるとそれぞれの会にはやうり限定された人物の往き来しかなかつたやうである。ここには参会者の名を欠いてどのやうな人物が集うたか不明であるが、逆に永好の参会が他の歌会に及ばず、限定的であることからそれは推測ができるのではなからうか。

口、『日次記』に見える歌会と概況

間宮永好家の月次会

毎月十一日を定例として開かれ、その数は二十一回(うち一度は中止)である。

萬延元年三月十一日(兼題 落花浮水) / 四月十一日(兼題 待郭公) / 五月十一日(兼題 田家螢火) / 九月十一日(兼題 月前菊) / 十月十一日(兼題 海辺時雨 当座残菊) / 十一月十一日(兼題 霜夜月 当座河凍) / 萬延二年二月十一日(会始め 兼題 霞中松 当座 海辺鷺) / 文久元年三月十一日(兼題 夜帰雁) / 四月十一日(兼題 朝卯花 当座 初子規 夏恋) / 五月十一日(歌題記載ナシ) / 八月十一日(兼題 野草花 当座水辺霧) / 十月十一日(兼題 冬眺望 当座 風前鐘礼) / 十一月十一日(納会 兼題 山河氷 当座水辺寒月) / 文久二年二月十一日(兼題 子日松 当座 山霞) / 三月十一日(兼題 霞中花 当座 川蛙 春恋) / 四月十一日(兼題 水辺紅花 当座 待子規) / 五月十一日 中止 門出の多忙による / 八月十一日(兼題 月前虫 当座 夜初雁) / 九月日闕(十一日か 兼題 里袴衣 当座 野鹿) / 十月十一日(兼題 夕千鳥 当座 風前落葉 この日今上崩御の報が入る 一橋殿上京猶予) / 十一月十一日(納め会 兼題 寒松 当座 冬動物) / 文久三年二月二日(月次発会 兼題 霞中松 当座 名所柳)

加藤千浪月次会

毎月十四日を定例として開かれ、その参加回数は十五回である。千浪は陸奥白河の人だが江戸に住まひした。歌は岸本由豆流や朝田弓槻の門下なので所謂江戸派に属し、名前の千浪も千蔭を意識したものである。萬延元年当時五十一歳であつた。

萬延元年四月十四日(兼題 市子祝) / 五月十四日(兼題 柚五月雨) / 九月十四日(兼題 閑落雁 当座寢覚鳴) / 十

月十四日(兼題 時雨 当座 閑庭霜) / 十一月十九日(兼題 松上雪 当座早梅) / 萬延二年一月十九日(兼題 早春柳)  
 / 二月十四日(兼題 春雨晴 春舟) / 文久元年四月十四日(兼題 夕卯花 当座 杜新樹) / 五月十四日(兼題 杜子規  
 当座 川辺夏草) / 八月十四日(兼題 社前月 当座 虫声入琴) / 十月十四日(八十子同伴 途中で気分悪く帰宅 兼題  
 朝紅葉) / 文久二年一月十九日(発会 兼題月前柳 当座 田家梅) / 四月十四日(兼題 新樹露) / 十一月十九日(会  
 納 兼題 雪中興 当座 寒山月) / 文久三年一月十九日(会始 兼題 遠村柳)

横山由清月次会

毎月二十一日を定例として開かれ、その参加回数は十五回である。由清は本姓塚越氏で横山桂子の許に養子に入つた。  
 本間遊清門から転じて井上文雄の門に入る。萬延元年当時三十五歳で永好の周辺では若い存在であつた。明治になり  
 考証の学者として政府に仕へたが、明治十二年に逝いた。

萬延元年四月二十一日(兼題 樹陰卯花) / 八月二十一日(兼題 萩露滋) / 九月二十一日(暮秋袴衣 当座橋上霧) /  
 十月二十一日(兼題 月前落葉 当座寄名所恋) / 萬延二年一月二十一日(兼題 春情在鶯 当座 柳緑洗浪) / 二月二  
 十一日(兼題 名所梅) / 文久元年四月二十一日(兼題 深夜子規) / 八月二十一日(横山由清養父七回忌追悼 兼題 夕  
 露) / 十月二十一日(兼題 枯野曙 当座 谷凍) / 十一月二十一日(納め会 兼題 閑庭松 当座 池水鳥) / 文久二  
 年一月二十一日(発会 兼題 月前梅 当座 曉鶯 徳川斉昭墓誌) / 二月二十一日(いたはりあり 欠 歌のみ出す) /  
 八月二十一日(兼題 鹿声両方 当座 待霧) / 十月二十一日(会納 兼題 山寒松 当座 題闕) / 文久三年一月十七  
 日(会始 兼題 春風解氷 当座 子日)

天野政徳月次会

毎月十二日を定例として開かれ、その参加回数は四回である。特に四回目は政徳歿後の追悼の歌会となつてゐる。政徳は五百石取りの幕臣で、大石千引の門人であり、師の号「野廬舎」を継いだ。文久元年八月十九日に七十八歳で逝いたので永好の周辺の人物としては高齢であつた。殊に歿後の追悼歌会には「おのれ四十年こなたの友なれば、いたはりなれどしひて行」つたのであり、政徳の門人である辻守静の談を引いて「政徳世に有しとき、しる所の常陸の國なにし村の岡にのほりて、みやりのまたなきをめでて、みまかりたらん後は、骨を分けてここにうづめしるしに松をう、べしといへりければ、いひおきしままにさものし」たことを書き、それで嶺上松と言ふ題で歌を詠んだといふ。文久元年当時永好は五十七歳であり、四十年の交友と言ふので文政四年、十七歳の頃からの関係があつたこととなる。『松屋歌集』には七十七賀の歌が見えてゐるが、萬延元年の記事にはそのことを欠いてゐる。

萬延元年五月十二日(兼題 樵路雨 当座 夏草落水) / 十一月十二日(兼題 松久緑 当座 待雪) / 萬延二年二月十日(兼題 橋辺霞 当座 柳) / 文久元年十一月十二日(天野政徳追悼会)

蜂屋光世月次会

毎月二十四日を定例として開かれ、その参加回数は八回である。光世は高田與清門なので永好と同門である。殊に萬延元年六月十日には「大江戸集竟宴」が開かれ「寄書祝」といふ題で歌が詠まれてゐる。永好は「あつめおく詞の花をかざしつゝ、あきもふみ、よちよのふるみち」と詠んだ。『大江戸倭歌集』は安政七年に一度編輯を終へて刊行されたやうで、内閣文庫本には同年の受入印が捺されてゐる。本書の跋文の日付は安政七年弥生末日であり、萬延改元が布達されたのはこの日次記には閏三月朔日となつてゐるので、このことの傍証となる。但し『大江戸倭歌集』はこのあと若干の手を加へて文久三年に個人の蔵版ではなく、書肆の蔵版として刊行されてゐる。なほ『大江戸倭歌集』に

は「源光世が家にて菊合したりけるまたのあしたつかはしける」と題する小笠原長儀の歌があり、当時歌会や歌合などが行はれてゐたやうである。光世は幕臣であり、その歿年は明治十五年である（『小中村清矩日記』同年八月十三日条に「蜂屋光世追悼会を兼ねたり」とある）。またその妻が鶴久子なので永好と同じほどの年齢であつたのではなからうか。

萬延元年六月十日 大江戸集竟宴（寄書祝）／八月二十四日（兼題 閑居月 当座 秋夕 江戸名所月）／九月二十四日（兼題 山紅葉 当座 秋獸 暮秋風）光格天皇懷紙写しを見る／十月二十四日（兼題 河網代 当座冬鳥）／十一月二十四日（兼題 雪中興 当座 待春）／萬延二年二月四日（兼題 梅花盛久 当座 鶯）／文久二年八月二十四日（兼題 小鷹狩 当座 袴衣 秋動物）／十一月二十四日（会納 兼題 名所松 当座 早梅）／文久三年二月四日（会始 兼題 待花 当座 春心）

### 井上文雄会

毎月十八日を定例として開かれ、その参加回数は十回である。（うち一回は遅参）。文雄は岸本由豆流や一柳千古の門下で田安家の典醫であり、江戸派に属し永好や由清の直接の師であつた。明治四年に七十二歳で逝いたので、萬延元年当時は六十一歳であつた。

萬延元年八月十八日（兼題 朝初雁 当座 里袴衣）／九月十八日（兼題 遠峰霧 当座岡紅葉）／萬延二年一月十八日（兼題 早春霞 当座若菜）／二月十八日（兼題 雪朝鶯）／文久元年八月十八日（兼題 都月 当座 故郷鶉）／十一月十八日（納め会 兼題 雪中鶴 当座 山家如春）／文久二年一月十八日（発会 兼題 海上春来 当座は遅参で詠まず）／五月十八日（兼題 雨後残花 当座 朝夏草 独聞子規）／十一月十八日（会納 兼題 雪中夜長 当座 竹多残）／文久三年一月十八日（会始 兼題 鶯告春 当座 社辺梅）

## 他の歌会

- 吉田定顕家花宴には萬延元年閏三月四日の一度のみ参加してゐる。この日は天野政徳や吉田敏成の他七、八人が参加したといふ。(兼題 帰雁幽 当座 松間花 定顕は幕臣で勘定役、加藤千蔭の甥といふ。『類題和歌鴨川集』三郎集、また鋤柄助之編幕末の江戸現存の歌人の『現存百人一首』に歌が見える。
- 林田正枝徳次郎月次会は萬延元年九月二十八日に「月次会をはじむ」とあるので新たに興された会であつて、八十子を連れてこの一度のみ参加してゐる。(兼題 秋山家 当座 閑庭菊) 正枝は「門人」とあるので永好の教へ子であるやうだ。永好の『松屋歌集』に「林田正枝がこしの國へゆくうまの錢に」と題する歌があり、『大江戸倭歌集』に歌が見える。
- 井出安随会には萬延二年一月二十五日の一度のみ参加してゐる。(兼題 月前柳 当座 朝鶯) 安随については知るところがない。
- 水戸太田十郎左衛門会には萬延二年二月九日の一度のみ参加してゐる。(兼題 稻荷詣 当座 庭若草 夜梅) 太田十郎左衛門は水戸藩士のやうだが、知るところがない。
- 因幡中将母北の方会始には文久二年一月十一日に一度のみ参加してゐる。(懐紙 兼題水辺若菜 鳥取藩主の池田慶徳は水戸の斉昭の子であるから、これは慶徳の義母(前藩主慶榮室整子)のことであらうか。これは新年の会始めて、文久二年の正月は縁故がある大名家の会始めに、以下のやうによく参加してゐる。
- 南部少将の北の方会始には文久二年一月十二日(兼題 水辺若菜)と翌年の二度のみ参加してゐる。これは別稿にも述べた通り南部利剛の妻明子の会である。明子は斉昭の子であり、その関係も前述した。翌文久三年一月五日にも「盛岡殿会始め」とあり、(懐紙 兼題寄柳祝)参加してゐる。
- 水戸御簾中の君会始には文久二年一月十六日に一度のみ参加してゐる。(兼題 水辺若菜) 水戸御簾中の君はここで

は藩主慶篤室、幟子(有栖川宮幟仁親王皇女)のことであらうか。

・秋田母北の方(佐竹義睦室悦子か)の会にはついては文久二年一月二十日の発会に一度のみ参加してゐるが、兼題や歌の記述はない。

#### ハ、その他の歌の集ひ

右に挙げた歌会とは別に寄り合つて歌を詠む会も行はれてゐた。その場所は永好の所であつたのか否かは定かではないが幾つかの記述がある。萬延元年三月二十九日条に「河野三貫はじめにて五十首哥よむ 杉浦愛子、同じき玉子、山本可意子、小原蔵子、市川里子、安岡良正、鋤柄助之、河野三貫、余、家婦等也、午三つより申二つに作る」とあり、時間の中で決められた数の歌を読み合ふ歌会があり、ここでは五十首を午から申の刻にかけて作歌してゐる。同様なことは一ト月も経たない、萬延元年四月二十日にもあつて「百首を詠む、池永為正、林田正枝、山本可意子、鋤柄助之、余、家婦等也、余家婦辰三刻より申二刻にをはる」とある。流石に百首になると根気も要たことであつて、午前中の辰刻から始めてゐる。文久元四月二十六日には五十首詠んだ。「数詠五十題、午より申にをはる 幹文 良正 為正 祐武 直道 正賢 可意子 静子 里子 鍔子 家婦」とある。大方五十首を二刻の時間で詠んでゐることがわかる。ここに見える人物(杉浦愛子、杉浦玉子、山本可意子、小原蔵子、市川里子、安岡良正、鋤柄助之、河野三貫 池永為正、林田正枝、久米幹文 田中直道、祐武 正賢 静子 芳野鍔子)は当時の永好の周辺にゐた江戸の歌人でもある訳だが、よく分からない人物もゐる。<sup>1)</sup>

また次のやうな記事もある。文久二年一月二十二日条に、有田吉順から使ひが来た。「きのふいひおきつる懐紙をかきてやる、題、霞添山色」こは本居豊穎の会はじめの題のよし也」とある。安政二年に江戸で父内遠を亡くした本居豊穎はその後江戸古学館にも勤めまた紀州を行き来しての生活でもあつたやうである。このときは江戸に滞在して

るのであらうか、永好は予てから依頼のあつた懐紙に歌を書いて有田吉順に持たせてゐる。吉順も江戸歌人である。

### 三、歌会の歌と歌集

なほ、これらの歌会に詠まれた歌が、この後に編まれた撰集に見えることがある。永好は歌会で詠んだ歌をそのままにせず、他の撰集に投じたりしてゐたのである。その例を些か示しておく。当然のことであるが詠んだ歌の手控へがあり、そこから撰集へ抜書きして送つたのであらう。さう考へると幕末に流行した類題の撰集にある歌は、全てではないにしろ、一度は歌会などにおいて詠まれたものであることも考へられよう。

永好の歌を多く載せる撰集としては水戸の朝比奈泰吉の編んだ『類題衣手集』がある。その永好の序文は文久三年三月はじめであるが、刊行は遅れて明治初年であつたやうである。本書の成立に関しては永好の序文からわかる。この序文が書かれたのは「文久三年三月はじめつかた」であるが、残念ながら『日次記』は文久三年の二月十六日までの記述しかないため、今少しのところで及んでゐない。永好の常陸退去については先に触れたが、それによればこの序文は常陸で書かれたことになる。巻末の作者姓名録によれば二百六十八人の出詠があるが、本書には永好は一四七首（春二八、夏二三、秋三〇、冬二〇、恋一五、雜三二）、八十子は九〇首（春一四、夏二〇、秋二三、冬一四、恋六、雜三二）といつた多くの歌が採られてゐる。初編は「常陸のくにうどのかぎり」と常陸歌人に限定してゐたが、二編については「二編よりはもろもろの國人のをもひろくとりあつめ物すべければ詠草おこせ給へかし」と常陸以外の人の歌を集めるとして呼び掛けたが、時代は明治となつてしまひ空しくなつたやうである。さて『類題衣手集』の中にある歌に『日次記』と同じ歌があり、ここから歌を選んだことがわかる。例へば、

松間花 立ならふ木のまをしめて咲花にゆづらまほしき松の千代哉

の歌は、萬延元年閏三月四日の吉田定頭家の兼題で詠まれた歌であり、

秋山家 しぐれの雨我山紅葉そめぬまに匂ひいでたる秋の香のよさ

の歌は、萬延元年九月二十八日の林田正枝の月次会の兼題で詠まれた歌（但し初出は「しぐれ降る」であつたのを改める）である。また、

河網代 河原風さむきおもひをあじろ人かゝりにみせてひをやまつらん

の歌は、萬延元年十月二十四日の蜂屋光世の月次会の兼題で詠まれた歌である。共に宛てた漢字や文字遣は異なるが、歌は同じものである。かう考へると『類題衣手集』の永好の歌の材料は萬延文久のかなり近いころの歌も含まれてゐることが分かる。同様に永好の家集である『松屋歌集』を見れば、この「日次記」にある歌が幾つも見出されることは、既に述べてきた。『松屋歌集』は永好亡き後に八十子によつて編纂されたのであつて、そこには八十子の気持も加はつたことであり、この『日次記』が参酌されたことは明らかであらう。

## を は り に

以上永好の『日次記』から幕末の国学者間宮永好の考証家の側面と、歌人としての側面とを明らかにしてみた。四年余の断片的な記述ではあるがその語るところは多く、ややもすれば歌人として一括されてしまふ人物が、実は他にも様々な活動をしてゐたことが明らかになつたことと思はれ、改めて永好の位置の再確認ができたのではないかと思はれるのである。令和四年は永好の百五十年祭に当るが、皮肉にもその墓所は無縁で処分されると言ふ。

何を以つて「国学者」とするのかはその定義が難しい。徳川時代の国学史を顧れば、歌の創作や国文の注釈、考証、また思想面の深化も挙げられる。歌しか詠まない人物もあれば歌は詠まない者もゐた。幕末期になればなるほど思想

面が持て囃されたが、それとは距離を置いた永好は考証と歌の創作、これに大きな柱を据えたのであった。そしてかやうなことは当時の他の国学者歌人と呼ばれる人物にも該当する営みではなかつたかと思ふのである。明治以降の堅実な考証の学問の萌芽はこの時代から既にあり、永好もその一人であつたのである。

『日次記』は江戸の永好の周辺を語るに十分な資料であるが、広いやうで狭く、狭いやうで広い江戸の町の中で、当時の国学者歌人らの横の繋がりがりやその動向の全体像が見えない難点がまだ残る。今後は永好の師である高田與清の活動と歿後の評価についても検討が必要と思はれるのである。ほな本稿は令和三年の春に急逝された阪本是丸先生の追悼の意味をも兼ねて執筆した。先生からは予て幕末維新時の所謂国学者の動向をまとめるやうにと言はれてゐたものの、なかなか思ふやうに動けなかつた。拙い成果の一つを今更ながらにまとめたものの時既に遅く、悔悟の念のみが残る。

#### 註

- (1) 『名家書翰集抄』(弥富濱雄編・歌文珍書保存会刊、大正七年)百八十六頁。
- (2) 『佐々木弘綱年譜』上巻五頁、安政四年七月以降の記事。
- (3) 江戸滞在中の弘綱の動向を示すものに、天理大学図書館所蔵の黒河春村『古物語類字抄』(弘綱の書写本があげられる。本書は安政四年霜月、江戸滞在中に春村の元へ出向き書写したもの(序文)である。委細は浦野都志子「黒河春村編『古物語類字抄』について」汲古 七十九号、令和三年六月。
- (4) 大沼宜規『考証の世紀——十九世紀日本の国学考証派——』、同氏『小中村清矩日記』。
- (5) 拙稿「幕末の国学者 問宮永好について——『喚犬喚鶏舎日次記』から——」『新國學』復刊第十三号(令和三年十月刊行予定)、同じく「幕末の国学者 問宮永好 その考証と文雅——『喚犬喚鶏舎日次記』から(二)——」『神道史研究』第六十九卷二号(令和三年十月刊行予定)参照。
- (6) 藤井貞文「萬葉集會讀記」『國學院雜誌』五十七卷六号、河野頼人「木村正辞の万葉集研究」『萬葉集會讀記』の紹介」北

九州大学文学部紀要」開学三十周年記念号、同じく「萬葉集會説記」十八号。ここには全文翻刻されてゐて、その当日の検討内容も知ることが出来る。

(7) 『武江年表』文久三年条「三月初旬より横浜に於いて、異国船の使船鎖港の御応接激切に及ばんの由、この事に付き岡巷の浮説により実否を弁ぜずして、去る丑年の如く、諸人懼怕のこゝろをいただき、耄嫗婦幼をして遠陬の僻地へ去らしめ、資材雑具は郊外の親戚知己の許へ預くる云々」とある。同様に井上文雄もこの時期に川越の安齋保美の許へ退去してゐる。

(8) 永好の著作で唯一刊行されたものは『掌中和歌年中行事』である。これ以外の著作がまとまつた形で広く流布しなかつたのは火災で焼失したと言ふ理由が有る。『松屋歌集』の久米幹文の序文には「あらはせる書どもは火にかゝりて大方はうせにし」とあり、また跋文にも同様に焼失した中でこの『松屋歌集』のみ残つたと記されてゐる。『掌中和歌年中行事』の巻末に「間宮先生著書目録」として二十四点の著書名と簡単な解説が記されてゐるが、この書目が後に『國學者傳記集成』に転載され、『國書總目録』はその書名のみ留めてその出典を『國學者傳記集成』としてゐるのはこれに拠る。なほ『國書總目録』にはこの二十四点以外に次の十一点が挙げられてゐる。ただしこの中には現存しないものもあるが参考にして挙げておく。詠草(八十子詠草ヲ含む)静嘉堂文庫/仮名考に書き添ふる条々 国会図書館/詔詞解索引(岡本保孝校)国会図書館/春の山路 嘉永二年 都史料館/松屋七九詠草 慶応三年 竹柏園/間宮永好稿本 東京大学図書館/万葉集略解補正 御茶之水図書館/八雲のしをり 天理大学図書館/日本歌学大系 第九卷所収/犬鷄隨筆『歌文珍書保存會叢書』九卷、『続日本隨筆大系』十一卷所収/歌林雜考『歌文珍書保存會叢書』十一卷所収/古学道統図 安政五年刊。

また『八雲のしをり』に「この頃予古言梯増補を作り出せるが、いとまなければ草稿のまゝにておけり」とあつて『古言梯』の増補があつたことが分かる。更に「予続名目抄を作らむ志ありて、書よむをり書きぬきおける、多くつもりにたれど、例のいとまのひまなさに、さながらおきつ」とあり、また公事題の歌集については「公事題をよめる歌、ものにこれかれみゆれど、その書きぬきてひとつになせるものなければ、公事題詠集といふものをつくりおけり。これも例の草稿なり。」とある。このことは『掌中和歌年中行事』の凡例にも「公事題歌集にのすべし」とある。ついで国文学研究資料館の古典籍データベースには本稿で扱つた『日次記』の他に次の三点がある。

楽章 東京大学国語研究室/ころもで日記 宮内庁書陵部/永好歌集 盛岡中央公民館

以上が現在で判明してゐるものである。またこの他に『大日本歌書綜覧』には永好の著作として『萬葉長歌分類』が見える。『萬葉長歌分類』五卷 写 間宮永好/長歌を抜き、草仮名に改め、天地、植物、動物(二卷)人物、遊(二卷)雑

(三卷)相聞問答(四卷)挽歌、賀(五卷)に分ち、各部更に幾多の題を設け、長歌を詠む模範とす。訓点は千蔭の略解による。天保九年に成る。」と見え、福井久蔵は実見したのであらうが本書もその後の行方が分からないが、これは先の目録に『萬葉長歌部類』とあるものと同じ書物であらうか。

(9) 『江戸名所和歌集』はこのあと文久四年に刊行され、永好は二十一首、八十子は久米八十子の名で六首の歌が採られてゐる。これより先に編まれた光世の『大江戸倭歌集』には永好、八十子ともに五首が採られてゐる。遅れて刊なつた本歌集に嘉永五年の婚礼前の久米姓を名乗るのは、書かれた時がこれ以前であつた故であらうか。なほ『松屋歌集』には「武藏名所の歌を峰屋光世の求にてよめる中に」と題して八首の歌がある。この中の「柳原堤」は『江戸名所和歌集』では「神田川」と題が改まり、また「瀧の川」の歌は載せられてゐない。このやうに考へると永好は多くの歌を光世の許に届けたのであつて、その中から二十一首が採られたのであつたやうだ。このやうにこの歌集を編むにあたり光世は知友に江戸名所の歌の出詠を頼んだやうである。『江戸名所和歌集』の序文は吉田敏成、永好、光世自序、跋文は井上文雄、横山由清である。これらの人物は『日次記』に散見される永好の周辺の人物であること今更言ふまでもない。

(10) 大沼宜規『考証の世紀』一七四頁参照。これによれば小中村清矩はこれより先の安政期に『続日本紀』の校訂作業をしてゐることがわかる。

(11) 杉浦玉子、市川里子、鋤柄助之、池永為正、小林正郷、有田吉順については『大江戸倭歌集』に見える。また鋤柄助之は『現存百人一首』を編み、そこには河野三貫、吉田定顕、有田吉順が見える。かやうに歌人として聞こえた人物もある。(12) 永好の『類題衣手集』の序文は次の通り。参考まであげる。

衣手にさまざまあり、錦あやのやことなきはさる物にて位の色の品々はいとうるはしくたけ高し、小忌の青すりめただしからねどこう神々しくよし、花、嶺、菊、紅葉やうの色々はえむになまめきてになくおかし、□ほつるえみのたぐひもくすしけれど、思捨かたし、さては今様のいろのざれたるども、とりどりにして珍しきに目とどめらる、さはいへざる衣手も其つまつまあやしげにゆかし、うたてと見ゆるはいかゞ物そこなひならざらん、こゝに篠屋のあるじ常陸のくにうどのかざり、はにめよくぬひおほせたるをえらべる此衣手よいづれもさる才におかしくめで、龍田ひめもあはれと見たまひ、棚はたつめよろしとほめたまひなむかし

文久三年三月はじめつかた

喚犬喚鶏之舎のあるじ永好識

(東京都立科学技術高等学校校主幹教諭・國學院大學兼任講師)

間宮永好日記(概要)

年月日	事項	備考
安政6. 5.24	犬鷄雜記なる	1巻墨付83丁
6.10	5月20日ころから股の間にかさできる(7、9日は回想記)	桃の実二つ程の大きさ 痛い
6.7	八十子に書かせて長嶺に文やる	返事来る
6.9	かさを医師が切る	
6.13	かさ平癒 机に寄ることができる	
6.19	文章長歌会再興	日善とやつてきたがこの頃亡くなる 横山由清と相談し再興
8.1	有田吉順土佐日記校正本よこす	歌あり 返歌あり
8.6	荒川氾濫の情報 熊谷忍が水浸し	先月十五日の台風による
8.8	娘とく簪をつける	杉浦愛子歯染、大坪いよ子眉かく
8.9	娘とくを南部の北の方へ出す	おもと人寿子(石崎)につける 八十子のいそしみによる
8.17	大坪重輝談 秩父の七月台風の被害	重輝は被害のあつた下吉田村の県令新井清兵衛の役人
8.24	黒澤郷香来 翁満死去(四月頃)手向歌を乞ふ	郷香は翁満弟 翁満65歳 日尾直磨コレラ死の情報
8.29	杉浦愛子 松の形の簪忘れる	歌をつけて返す
9.1	前黄門齊昭 水戸へ出立	
9.10	水戸吉田氏来 鶴峰戌申死と云	
9.14	山本かい子 孫生まれる祝	歌を贈る
12.6	杉浦愛子 消息来	雪 返事書く
12.8 (11月)	坂母一年の忌	11月の書き忘れ 追記
安政7. 1.4	試筆 歌詠みはじめ	早春衣 八十子もあり
1.7	有田吉順(小松園)別れ	あるへいとうの蕨届く 根芹に鶴の形の落雁に歌をつけて返す
1.11	小松園から梅の枝に結んで歌届く	
1.13	立春	歌あり
3.3	雪 櫻田門外の情報	水戸の浪人十七人切りかかり首を取る 別記あり
萬延元. 閏3.1	萬延改元	
閏3.4	吉田定顕家花宴	天野政徳 吉田敏成他7.8人 兼題帰雁幽 当座松間花
3.11	家の会	兼題 落花浮水
3.28	小山田与淑が借りた本を佐藤信古へ返す仲介	令義解万葉和名抄姓氏録拾芥抄など 故翁自筆校正本
3.29	河野三貫すすめて五十首詠む(丑三～申三刻)	松浦愛子同玉子山本かい子小原蔵子市川里子安岡良正鋤柄助之河野三貫八十子
4.1	新造土蔵土ならし 蚊帳釣る	
4.5	喚犬喚鷄雜記1巻稿成	海上涵巻と名付く 11行28字50張
4.8	安岡良正とぶらふ	東叡山中橋一枝おくる 子規初鳴き
4.11	家の月次会	兼題 待郭公

4.14	加藤千浪月次会	兼題 市子祝
4.16	土蔵の棟上	
4.18	国郡興廃考の稿をはじめ	
4.20	百首を詠む(辰三～申二刻)	池永為正 林田正枝 山本可意子 鋤柄助之八十子
4.21	横山由清月次会	兼題 樹陰卯花
4.29	土蔵あらうち	
5. 3	大坪重輝杉浦愛子へあやめを送る	歌あり 文あり
5. 4	小地震あり	
5. 6	八十子風邪 病臥	
5. 7	八十子病状 医師来診	
5. 8	山本可意子へ 楓樹紅葉送る	歌あり 返歌あり
5.10	小林正郷竹原彦太郎上京饞別会 柳橋萬八楼	八十子の病臥のため欠
5.11	月次会	兼題 田家螢火
5.12	天野政徳月次会 八十子癒ゆ	兼題 樵路雨 当座 夏草落水
5.14	加藤千浪月次会	兼題 柚五月雨
5.15	有田吉順紫陽花おこす	歌あり
5.17	久米幹文から学問所活字日本紀借りて写す	跋文転記あり
5.22	真福寺本古事記上巻校合	奥書転記あり
6. 9	八十子本復 床はらひ	
6.10	蜂屋光世大江戸集寛宴	寄書祝 歌あり
6.15	萬葉集略解正撰補注会始 木村宅	久米幹文 横山由清 八十子 木村正辞
同日	数日前生家渡辺清三郎逃亡と聞く	弟清蔵の養子 所領書を津田家に返す 清三郎母に扶助米支給
6.24	萬葉会 横山宅	
7. 9	萬葉会 自宅	
7.19	萬葉会 木村宅	
7.21	源氏物語講義再開	
7.24	嵐の情報	薨を破り樹を倒す
7.25	立野良道書状来 台風被害	
8. 5	萬葉会 自宅	
8.18	井上文雄会	兼題 朝初雁 当座 里袴衣
8.21	横山由清月次会	兼題 萩露滋
8.22	水戸前黄門重篤 実は15日に死の情報	
8.24	蜂屋光世会	兼題 閑居月 当座 秋夕 江戸名所月
8.25	猿渡盛章来	詠草二巻添削願ふ 故翁の弟子 70歳
8.26	水戸藩主下国 斉昭に赦免状	
8.27	水戸前黄門薨去 7日間音曲停止	
8.28	萬葉会 小中村宅	
9. 1	土蔵修理終	
9. 5	萬葉会 小中村宅	不参
9.11	月次会	兼題 月前菊
9.14	加藤千浪月次会	兼題 閑落雁 当座 寝覚鳴
9.18	井上文雄会	兼題 遠峰霧 当座 岡紅葉
9.20	中安半十郎書状来 父死	津田家士 永好父の養女の婿
9.21	横山由清月次会	暮秋袴衣 当座 橋上霧

9.24	蜂屋光世会	兼題 山紅葉 当座 秋猷 暮秋風 光格天皇懷紙写し拜見
9.28	門人林田正枝徳次郎月次会始め	兼題 秋山家 当座 閑庭菊 八十子も行く
10. 1	冬の空のけはひ	
10. 2	中安百助来 父の形見羽織帯持参	
10. 3	安岡良正来 山田常典6日熊野行	
10.11	月次会	兼題 海辺時雨 当座 残菊
10.14	加藤千浪月次会	兼題 時雨 当座 閑庭霜
10.18	煤払ひ	
10.21	横山由清月次会	兼題 月前落葉 当座 寄名所恋
10.22	萬葉会	
10.24	蜂屋光世会	兼題 河網代 当座 冬鳥
11. 4	萬葉会	
11.11	月次会	兼題 霜夜月 当座 河凍
11.12	天野政徳月次会	兼題 松久緑 当座 待雪
11.19	加藤千浪月次会	兼題 松上雪 当座 早梅
11.22	宮崎実右衛門披露故実を乞ふ	阿波の殿人 加藤千浪をしるべに行く 当座歌あり
11.24	蜂屋光世会	兼題 雪中興 当座 待春
11.27	母の3年忌日	
11.28	母の墓参 長徳院へ行く	
12.13	井出左内披露故実を乞ふ	阿波の殿人 加藤千浪をみて行く 当座歌あり
萬延2.	試筆 歌詠みはじめ	歌あり
1. 1		
1.15	萬葉会 読始 木村宅	
1.18	井上文雄発会	兼題 早春霞 当座 若菜
1.19	加藤千浪月次会	兼題 早春柳
1.21	横山由清月次会	兼題 春情在鶯 当座 柳緑洗浪
1.25	井出安随会	兼題 月前柳 当座 朝鶯
1.25	隅田川の梅見にまかる	
2. 4	蜂屋光世会	兼題 梅花盛久 当座 鶯
2. 9	水戸太田十郎左衛門会	兼題 稲荷詣 当座 庭若草 夜梅
2.11	家の月次会はじめ	兼題 霞中松 当座 海辺鶯
2.12	天野政徳月次会	兼題 橋辺霞 当座 柳
2.14	加藤千浪月次会	兼題 春雨晴 春舟
2.18	井上文雄会	兼題 雪朝鶯
2.21	横山由清月次会	兼題 名所梅
2.24	盲人の按摩語	
2.25	上野の花 三分開	
文久元.	文久改元	
2.28		
2.29	上野花見 十分花盛	
3. 4	福住正兄来 上野隅田の花見へ行く	
3. 6	福住正兄来 明日帰る	吉岡信之へ実方集注釈3冊仮名考1冊託す
3.11	月次会	夜帰雁
3.12	二女豊麻布の殿から帰る	

3.16	二女豊麻布の殿にまゐらす	
3.19	萬葉会	
3.24	長男好春死去	津田家士 山崎安之助より告ぐ
4. 1	好春死去によりその次男淳吉を呼びとる	次男槻次郎の乞による
4. 5	萬葉会	
4. 7	山本可意子に庭の花をおくる	
4.11	月次会	兼題 朝卯花 当座 初子規 夏恋
4.14	加藤千浪月次会	兼題 夕卯花 当座 杜新樹
4.17	ほととぎす初鳴く	
4.21	横山由清月次会	兼題 深夜子規
4.26	数詠五十題 午から申の刻	幹文 良正 為正 祐武 直道 正賢 可意子 静子 里子 鍬子 八十子
4.28	萬葉会 木村宅	
5.10	萬葉会 横山宅	
5.11	月次会	題、歌記載なし
5.14	加藤千浪月次会	兼題 杜子規 当座 川辺夏草
5.27	萬葉会 小中村宅	
5.28	彗星見る	酉の刻 光二丈ばかり本ふとく末ほそし 世に豊年星といへり
5.29	巷説 東禅寺事件	
6. 2	静子談東禅寺の件	
6. 3	萬葉会	
6.23	幹文談 屋代弘賢旧蔵書	因幡中将が買ふので達磨屋へ行き値を問ふ 6両
6.26	因幡中将使来 屋代旧蔵書搬出	日本紀以下書目記載
6.28	萬葉会	
7.11	高田平八郎死去	同母妹幸の夫
7.27	世上噂 葛飾二合半に二穂ある稲あり 豊作の前兆	
8. 1	米の値段	
8. 6	桜田門外の罪人処刑	
8. 9	八十子有卦の祝	唄曲師坂田仙八を呼び三味線など遊ぶ
8.11	月次会	兼題 野草花 当座 水辺霧
8.14	加藤千浪月次会	兼題 社前月 当座 虫声入琴
8.18	井上文雄会	兼題 都月 当座 故郷鶉
8.21	横山由清養父7回忌追悼	兼題 夕露
8.28	萬葉会 横山宅	
9. 2	箱根温泉行	旅行記は別にあり
9.12	帰宅	藤沢で例の病 急ぎ帰る
9.15	神田祭礼 例の病耐えがたし	
9.25	病臥中 見舞あり	
9.26	見舞品届く	因幡殿盛岡殿芳野鉄子市川里子茗荷屋
10. 2	土佐殿北の方見舞あり	
10. 5	加賀殿見舞	
10.11	月次会	兼題 冬眺望 当座 風前鐘礼
10.12	紅葉見に根津神社へ	八十子 山本かい子

10.14	加藤千浪月次会 八十子同伴 途中で気分悪く帰宅	兼題 朝紅葉
10.21	横山由清月次会	兼題 枯野曙 当座 谷凍
10.23	萬葉会	
11. 6 但し10 月と誤	由清来 来年の暦の冬至話題	
11. 8	萬葉会	
11.11	月次納会	兼題 山河氷 当座 水辺寒月
11.12	天野政徳追悼会	四十年の交友 門人辻守静談 嶺上松
11.15	仁恭(誤孝)天皇皇女和宮着	
11.19	御婚礼式 辻警固おごそかなり	
11.18	井上文雄会 納め	兼題 雪中鶴 当座 山家如春
11.21	横山由清会 納め	兼題 閑庭松 当座 池水鳥
12. 3	萬葉会 小中村宅	
12. 9	盛岡 北の方松姫御袖留	八十子と歌贈る
12.17	盛岡 侍従から少将に転じる報	
12.18	萬葉会 木村宅	
文久2. 1. 1	雪降る 例のやうに神田の社に詣でず	
1. 2	新年試筆 歌あり	
1. 5	有田吉順 年始海苔持参	
1. 9	有田吉順 短冊遣はず	松迎春新
1.11	因幡中将母北の方会始	懐紙 兼題 水辺若菜
1.12	南部少将の北の方会始	兼題 水辺若菜 懐紙
1.15	坂下門の変の情報	
1.16	水戸御簾会始	兼題 水辺若菜 歌は前と同じ
1.18	井上文雄発会	兼題 海上春来 当座は遅参で詠まず
1.19	加藤千浪発会	兼題 月前柳 当座 田家梅
1.20	秋田母北の方 発会	
1.21	横山由清発会	兼題 月前梅 当座 暁鶯 この日徳川斉昭墓誌転記
1.22	有田吉順懐紙遣す	霞添山色 本居豊穎発会の題
2. 2	家の作事始め	大工滝蔵 左官彦四郎 屋根与三郎
2.11	月次会	兼題 子日松 当座 山霞
2.21	横山由清会	いたはり 欠 歌のみ
3. 2	八十子と上野へ花見 まだあまり咲かず	
3. 5	八十子上野へ 五六分 待ち人のため不参	
3.11	月次会	兼題 霞中花 当座 川蛙春恋
3.13	上野へ花見 隅田川へ回る	
3.18	続日本紀会読始め	参加者は萬葉会と同じでこの日萬葉会あり 4年2月まで
3.22	播磨風土記書写をはる	國學院大學図書館蔵『播磨風土記』奥書 右 播磨風土記併逸文墨附四十七張 以久米幹文 本書写也 文久二年三月廿四日喚犬喚鶏之舎 主人間宮永好
3.28	萬葉集会読 小中村宅	
3.29	散木奇歌集下巻校訖	

4. 1	和名抄類語草稿なる	
4. 8	萬葉四卷 諸説今案書入畢 同会 木村宅	
4.11	月次会	兼題 水辺紅花 当座 待子規
4.14	加藤千浪会	兼題 新樹露
4.18	井上文雄会	兼題 雨後殘花 当座 朝夏草 独開子規
5.11	月次会中止 門出の多忙による	
5.14	箱根温泉行 八十子と 旅日記あり	
6.17	湯浴みから帰る	
6.29	萬葉会	横山由清不参 妻がはしかと木村正辞の談
6.30	仙石家来土岐来	久胤歌集について
7.12	四男久住磐三郎あかもがさ 養父九兵衛使来	
7.13	久兵衛使来 水戸の用命丸を飲む	娘とよ 麻布からあかもがさで帰る
8. 7	亡妻十三忌 玉林寺にて供養	
8. 9	末女豊 麻疹おこたり 御殿へ	
8.15	一橋慶喜 のこと風聞 総裁職の叡慮	
8. 3	コレラヒウルムス流行 町人二十万人死亡の風聞	
閏8. 9	萬葉会読 木村宅	小中村宅は遠くなつた
8.11	月次会	兼題 月前虫 当座 夜初雁
8.15	月見 先月は麻疹で延期	水戸斉昭 大納言に追贈
8.21	横山由清会	兼題 鹿声両方 当座 待露
8.24	蜂屋光世会	兼題 小鷹狩 兼題 袴衣 秋動物
8.25	八十子麻布帰宅談	来春は水戸へ帰る人多し
8.28	続日本紀会読 横山宅	江戸名所和歌の序を書く(刊本には月日欠)
9. 4	箱根の紀行浄書終	
9. 8	仁徳紀から安康紀校正 萬葉会読六卷	横山木村来 清短欠 幹文忌中
9.11	月次会	兼題 里袴衣 当座 野鹿
9.18	日本紀竟宴歌校正 因幡の殿に奉る	
9.20	浅草花屋敷へ行くも雨で帰参	
9.22	日本紀十四卷 再校正	
9.24	盛岡殿北の方10月中頃かしこへ移住	豊の奉仕問題
9.25	仙台殿の北の方10月5日下向	
9.26	仙台殿の北の方から八十子に物たまふ	
9.27	八十子水戸殿へ 一橋殿10月12日京へ出	
10. 4	安岡良正書状来 返事あり	転記あり
10. 9	萬葉会読 因幡中将北の方首途 八十子送る	小中村疾瘡不参
10.11	月次会 今上崩御 一橋殿上京猶予	兼題 夕千鳥 当座 風前落葉
10.12	堀場玄碩へ行く	八十子の養子になつたのを久米に返す
10.13	土岐久郁国へ帰る	久胤の歌集の跋文
10.17	欽明紀から敏達紀まで再校畢	
10.21	横山由清会納	兼題 山寒松 当座
10.24	豊 盛岡の館で賜り物白銀など	
10.26	用明紀から推古紀まで再校	
10.28	萬葉会	
11.11	月次会納め会	兼題 寒松 当座 冬動物
11.16	四郎祐之妻めとる 行く夜更けて宿	
11.18	井上文雄会納	兼題 雪中夜長 当座 竹多残

11.19	加藤千浪会納	兼題 雪中興 当座 寒山月
11.23	萬葉会 横山宅	
11.24	蜂屋光世会納 新撰六帖一校了	兼題 名所松 当座 早梅
11.25	舒明紀皇極紀畢	
11.29	齊明紀再校畢	
12. 1	新撰六帖二卷校畢	
12. 5	阿佛尼うたたね1冊了	
12. 9	萬葉集会読	
12.12	庭のをしへー巻うつす	
12.19	天智文武上紀再校畢	
12.29	新撰六帖校正卒業	
文久3.	大坪重禪三嶋来 歌詠む	
1. 1		
1. 2	豊子盛岡の殿よりまかつ	23日北の方のお供でかしこへ下る罷り申し
1. 3	豊を連れて玉林寺長徳院 久住祐敬宅泊	
1. 4	豊帰る 祐敬 養母 嫁送る	
1. 5	盛岡殿会始め	懐紙 兼題 寄柳祝
1. 8	山本可意子に三弦を返す	
1.13	隅田川の梅見に行く 八九分	
1.17	横山由清会始	兼題 春風解氷 当座 子日
1.18	井上文雄会始	兼題 鶯告春 当座 社辺梅
1.19	加藤千浪会始	兼題 遠村柳
1.20	風邪の心地 伏せる	
1.21	小田原吉岡信之妻娘で来 病臥	俗称儀太夫 去年隠居 府生と名乗る
2. 1	床あげ	
2. 2	月次発会	兼題 霞中松 当座 名所柳
2. 4	蜂屋光世月次会始	兼題 待花 当座 春心
2. 6	上野へ花見 三四分	
2.10	上野行 実にまさかり	
2.12	上野 新堀まであくがれ出	
2.13	將軍上洛 軽装で	人々のわづらひを思はれてのこと
2.14	山本可意子へ竹を渡す	物干す料
2.16	水戸侯將軍のお供で上洛 八十子見送り	

伊能穎則の歌集『新編なつごころも』(『香取群書集成』巻四、巻五)に、歌題の傍らに「問宮会」「柯堂(井上文雄)会」「天野会」「蜂谷(屋)会」などと見え、それぞれの歌会で詠まれたことがわかる。他に久松祐之、朝田由豆伎、清水謙光、本妙寺日善の会にも出入りしてゐることがわかる。また、穎則は問宮家での五十首詠にも参加し、問宮永好新室発会にも出てゐる。嘉永元年6月15日に永好と共に海上の磯めぐりをしてゐる。明治初年の神祇・文部行政に関与する人脈はこの頃から萌芽してゐたと言へる。